

# 米國フリーア美術館藏水月觀音菩薩圖再考\*

Revisiting the Water-moon *Guanyin* in the Freer Gallery of Art

坂尻彰宏・田林啓

## はじめに

米國・ワシントンのフリーア美術館 (Freer Gallery of Art) に所藏されている水月觀音菩薩圖 (F1930.36) [圖 1] は莫高窟藏經洞將來美術品のひとつであり、非常に早い段階から記録・研究がなされてきたユニークな作品である。しかし、最初期の研究以降、この作品の現物の觀察に基づいた研究は行われておらず、圖像や供養人題記・功德記（發願文）の解釋には問題が残されている。そこで、我々は本作品の現物調査に基づいて<sup>1</sup>、供養人の比定や本作品の美術史的位置付けを行い、本作品の研究の新たな方向性を示したい。

## 一、本作品の傳來

本作品は、藏經洞の發見直後に中國のコレクターの間を轉々とした後、1930年に米國・ワシントンのフリーア美術館に收藏された。

まず、本作品は、藏經洞發見直後の1904年に敦煌縣令の汪宗瀚（字は栗庵）から當時の甘肅學政で藏書家・金石學者の葉昌熾に寄贈されている<sup>2</sup>。彼の日記である『緣督廬日記』の甲辰年（光緒三十年）八月二十日（1904年9月29日）の記述には、「汪栗庵來公私兩牘…、又宋畫絹本水月觀音象、下有繪觀音菩薩功德記、行書右行、後題于時乾德六年歲次戊辰五月癸未朔十五日丁酉題紀。又大字一行云節度行軍司馬金紫光祿大夫檢校司空兼御史大夫上柱國曹延清供養。又三行云女小娘

\*本研究は JSPS 科研費 JP20H01326 の助成を受けたものである。

<sup>1</sup>著者らは、2023年3月に米國で敦煌畫調査を行い、3月22日にフリーア美術館にて本作品の現物調査を行った。調査にあたっては、フランク・フェルチェンス氏 (Frank Feltens、フリーア美術館)、ならびに瀧朝子氏 (大和文華館) から多大な協力を得た。記して感謝したい。なお、この米國調査の成果、とりわけ美術史的分析の詳細については、田林・坂尻 2024 を参照。

<sup>2</sup>汪宗瀚と葉昌熾との關係や文物の授受については、蔡 2011、96-98 頁参照。

子宗花一心供養、慈母娘子李氏一心供養、小娘子陰氏一心供養。其幀僅以薄紙拓而千餘年不壞、謂非佛力所護持邪。又寫經三十一葉。…皆梵文。以上經象栗庵皆得自千佛洞者也。」<sup>3</sup>とあり、本作品が藏經洞將來品として汪宗瀚から葉昌熾に贈呈されたことや、功德記と供養人題記について簡潔に記録されている。この1904年は、藏經洞が発見されたとされる1900年から4年目にあたり、ヨーロッパの探検隊のスタイン（Aurel Stein）が莫高窟を訪れた1907年の3年前にあたる。個人の日記に過ぎないとはいえ、學者でもあった葉昌熾による本作品の記述は、藏經洞將來文物の最初期の學術的記録のひとつであるといえよう<sup>4</sup>。



圖1：水月觀音菩薩圖 フリーア美術館所藏

<sup>3</sup> 『緣督廬日記』第7冊、4574-4575頁。

<sup>4</sup> 榮1997、4-5頁。

その後、本作品は、呉興（湖州）の蔣汝藻の手に移り、ニューヨークの山中商會を経て、1930年にフリーア美術館に賣却されている。本作品は、葉昌熾から密韻樓などの藏書で知られる蔣汝藻の手に移ったとみられ、1923年に發表された王國維の研究論文である「曹夫人繪觀音菩薩象跋」には、「南林蔣氏藏敦煌千佛洞所出古畫、上層畫觀世音菩薩象、下層中央寫繪象功德記…」とあり<sup>5</sup>、この時期に本作品が蔣汝藻の所有物であったことが分かる。ただし、程なく本作品は蔣氏の手を離れ、中國國外の美術品市場に流れたようで、ニューヨークの山中商會の手配で、1930年1月にワシントンのフリーア美術館へ納入されている<sup>6</sup>。

以上のように、本作品は、美術品市場に流れた藏經洞由來の文物の中では、その傳來をかなり具體的に追跡することができる稀な美術品であるといえる。

## 二、繪畫の特徴

本作品は、縦107.1cm、横59.1cmの絹本着色畫で、敦煌絹本畫のなかでも中幅（大中小幅の分類中）の作品である。大光背を負い、楊柳を手にする水月觀音像を中心とし、その兩脇に供養菩薩2體を配し、畫面下部に北宋・乾德六年（968）功德記と男性供養人像1體、女性供養人像3體を表す。畫面の四方には、一つずつ短冊形があり、上の左右の大きなそれは、各々黄色地と赤褐色地に塗り分け、前者は中尊の尊名「南无大悲救水月觀音菩薩」を記し、後者には文字が記された痕跡がない。ここで傍題が必要であるのは、水月觀音のみであることは明らかであり、赤褐色地の短冊形が、なぜ附されたのかは不可思議である。ギメ美術館所藏「弥勒如來圖」や白鶴美術館所藏「藥師如來圖」が、それぞれ阿弥陀や釋迦でもあるように、中尊の圖像にダブルイメージを持たせることを當初計畫していたのであろうか<sup>7</sup>。一方、下の短冊形は、やや小さく、供養菩薩に伴うもので、上の2つと配色を反對にし、向かって左を赤褐色地、同右を黄色地として、バランスを圖る。いずれも「持花供養菩薩」と書す。水月觀音の頭上では、七弁の圓花およびその左右の十三弁花を描き、それぞれを圍む葉から瓔珞形の裝飾を垂下させる。中尊の水月觀音〔圖2〕は、据香爐と二水瓶を置く壇を前にして、蓮華座に結跏趺坐する。下端に雲氣を伴う大圓光を負い、その内側に更に火炎光背、二重の身光と三重の頭光を具す。赤系の裙と瓔珞、瓔珞と接續する胸飾、寶石を連ねたような頸飾、

<sup>5</sup>王 1923、985 頁（1968 年の再録版の頁數、以下同様）。

<sup>6</sup>榮 1997、4-5 頁、蔡 2011、100-101 頁、フリーア美術館とアーサー・M・サックラー美術館の運営を統合した國立アジア美術館の解説、[https://asia.si.edu/explore-art-culture/collections/search/edanmdm:fsg\\_F1930.36/](https://asia.si.edu/explore-art-culture/collections/search/edanmdm:fsg_F1930.36/)（2023 年 12 月 1 日確認）を参照。

<sup>7</sup>ジャック・ジエス（編）『西域美術—ギメ美術館ペリオ・コレクション』第 1 卷、講談社、1994 年、圖版 15、『白鶴美術館館藏品選集』白鶴美術館、2018 年、圖版 122。

臂釧、腕釧、條帛、耳環、化佛を附す寶冠を身に着け、屈臂した右手を上げて、その第1指と第2指で楊柳をつまみ、下垂した左手の第3指と第4指で寶瓶の頸部を挟み持つ。條帛と裙にはそれぞれ、三弁の花文と松葉文のような植物文を散らす。また裙の彩色にはグラデーションによる立體感がつけられ、同様の手法は光背の一つ一つにも認められる。面貌は、肩幅とほぼ同等の幅があり、左右に広がる切れ長の目、長い鼻梁、下部に寄る口、肉厚の頬と顎を特徴とする。身體は、胸の張りりと腰の括れを強調する。



圖2：水月觀音菩薩像 水月觀音菩薩圖 フリーア美術館所藏

中尊の足下で片膝をついて跪坐する持花供養菩薩像は、華籠を持して、中尊に向かって散華する様子を示す。中尊同様にふっくらと豊かな頬と顎、下方に寄る口、切れ長の目が特徴的で、側面形であるため、鼻先の突出も強調される。



圖3：女性供養人像 水月觀音菩薩圖  
フリーア美術館所藏（左）



圖4：男性供養人像・女兒供養人像 水月  
觀音菩薩圖 フリーア美術館所藏（右）

一方、供養人像は、功德記に向かって左側に2體の女性坐像 [圖3]、向かって

右側に女兒立像と男性跪坐像1體 [圖4] を褥上に配す。いずれにも供養人題記が附く。供養人題記、功德記については次章で詳述するが、女性坐像のうち、功德記寄りのやや大きな像が母の像（供養人第2身）であり、その後ろが「小娘子陰氏」像（供養人第1身）である。「女小娘…」の女兒像（供養人第3身）も含めて、女性像はいずれも鳳凰冠を戴き、2本の寶石を連ねる頸飾とその下のスカーフ状の頸飾、更に垂飾を伴う寶石状の頸飾を着け、その身分の高さを示す。鳳凰冠は、曹元忠開鑿の莫高窟第61窟の曹議金娘（于闐王后）像やギメ美術館所蔵「被帽地藏菩薩十王圖」（太平興國八年（983））に描かれる曹議金の末裔である張氏像 [圖5] に代表されるように、王族の女性の装飾として用いられる。身に纏う披巾、上衣、內衣、裙にも文様が入られ、上衣や裙に金泥で鳳凰や三弁花文等が表わされ、披巾や內衣は淡い彩色を用いて絞り染め風に表現し、あるいは飛禽を描く。側面形の顔は、上記の供養菩薩と同様の特色を持つが、より詳細に描き込み、上下瞼の盛り上がりや鼻翼も表現し、更に目の大きさや角度、鼻先の突出具合によって各人の描き分けも意識されている。額の中央に花鈿を付け、頬に薄紅を挿しており、ここにも貴人の装飾性が再現されている。最後に、当時の敦煌の統治者である曹氏の姓を附す男性像（供養人第4身）であるが、幞頭を戴き、赤褐色の腰帶を巻いて黒袍を纏い、柄香爐を両手で持して跪坐する。幞頭は、脚がピンと張り、先端が上を向き、また袍の袖と襟後部からは、女性像と同様の絞り染め風に彩られた內衣を覗かせる。全體に赤みがかった肌色をする顔貌はやはり太い眉や先端が細い口髭、やや突き出す脣に個性が現れ、また頭髪は一本一本を描線で丁寧を表す。



圖5：張氏遼眞像 被帽地藏菩薩十王圖 ギメ東洋美術館所蔵

全體を通して、彩色は淡いが、<sup>うんげん</sup>縵縵彩色は効果的に施され、また供養人像のそれは、尊像に比して、入念に爲され、各服飾の塗り分けも行われる。また、女性上衣の文様、そして供養人それぞれの面貌の描き分けが認められ、各人の個性が表出される。描線に関しては、尊像の肉身の描き起こし線や供養人像の顔のそれは、形態に則して比較的丁寧で張りのあるものであるが、その他の描線は、揺れ動き、ラフスケッチを思わせる様子を示す。ラフスケッチ風の描寫の最たるものは、中尊の耳環や腕釧などの装飾の輪郭線であり、描寫水準の差異は、女性供養人の指の數すらも明確に示さない手の表現にも認められる。



圖 6：畫絹 水月觀音菩薩圖 フリーア美術館所藏

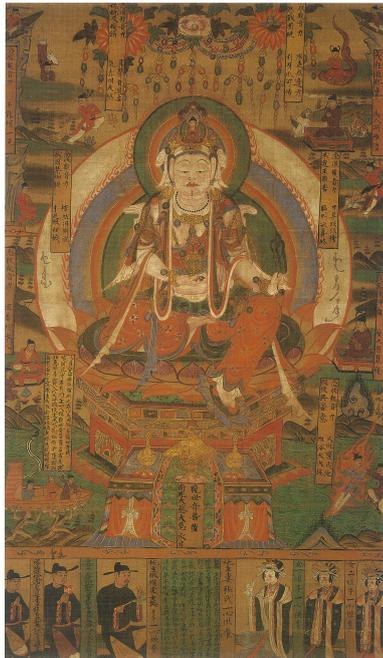


圖 7：水月觀音菩薩圖 四川博物院所藏



圖 8：被帽地藏菩薩十王圖 ギメ東洋美術館所藏



圖 9：被帽地藏菩薩像 千手千眼觀音菩薩圖  
ギメ東洋美術館所藏

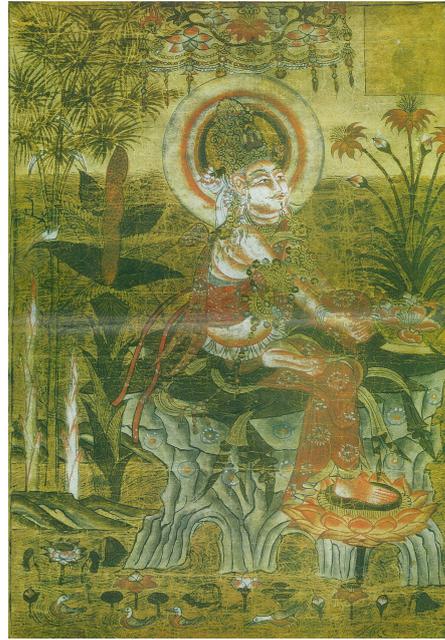


圖 10：水月觀音菩薩像 ギメ東洋美術館所藏



圖 11：菩薩坐像 大英博物館所藏

基底材の絹 [圖 6] は、1cm 四方で、經絲 51 本、緯絲 22~31 越である。

以上の水月觀音圖は、顔貌表現における堂々たるふくよかさ、側面形での鼻先の丸み、男性供養人像の脚の張る幞頭<sup>8</sup>など、至る所に紀年銘にふさわしい北宋代の特徴が看取される。また中尊の光背の構成においても、四川博物院所藏「水月觀

<sup>8</sup>黄能馥・陳娟娟・黄鋼編（著）、栗城延江（譯）『中國服飾史圖鑑』第 2 卷、東京、科學出版社、2019 年、192 頁参照。

音菩薩圖」〔圖7、建隆二年(961)〕やギメ美術館所藏「被帽地藏菩薩十王圖」〔圖8、太平興國八年(983)〕の中尊、同館所藏「千手千眼觀音菩薩圖」〔圖9、太平興國六年(981)〕の被帽地藏像と近似する。水月觀音の圖様に關して言うと、一般にギメ美術館の紙本畫〔圖10〕に代表される圖様、すなわち側面形で、ゆったりと片脚を踏み下ろす姿を思い起こすが、そうではなく、本作は正面形で、結跏趺坐する。もちろん水月觀音にも正面形のタイプはあるが、例えば前掲の四川博物院像では、正面形のタイプであっても片脚を踏み下ろす姿勢はとる。本作の中尊は、水月觀音との傍題を附すが、その圖様は、むしろ大英博物館所藏の一連の紙本畫〔圖11〕に表されるような、10世紀に廣く使用され、各種の圖像に轉用された菩薩坐像のそれを基本としていると言える。

よって、本作は、北宋という時代性と、高低の相混じる描畫水準を具え、圖様においても汎用性と個性のあるものが併存する。廣く流通し、用いられる型を基本として、赤系の裙や條帛などの目立つ要素や、肉身線など圖像の重要な箇所、そして、個性を生む供養人の顔に焦點を當てて畫力を注力することで、一見して見榮えのする作品に仕上げた印象を受ける。

### 三、供養人題記・功德記

以下に、本作品の下部に記された傍題の供養人題記と功德記の録文と翻譯を示し、先行研究の録文との異同は録文注に記す。なお、葉は『縁督廬日記』第7冊、4574-4575頁；王は王1923、985-986頁；『文録補』は5819頁；馬は馬德1999、171-172頁；徐ほかは徐自強・張永強・陳晶(編)2014、442頁；張・郭は張小剛・郭俊葉2021、464-465頁；フリーアはフリーア美術館の解説<sup>9</sup>を示す。

【供養人題記】〔圖3、圖4〕

(1) 小娘子陰氏一心供養

録文注：先行研究諸家に異動なし。

(2) 慈母娘子〔李〕氏一心供養

録文注：「李」字の部分は、現在では絹地の缺落で穴が空いており、「李」字の右のはらいがかろうじて確認できるだけで、その他の部分は失われている。葉は「慈母娘子李氏一心供養」、王は「慈母娘子□氏一心供養」、馬、徐ほか、張・郭は「慈母娘子翟氏一心供養」とする。

<sup>9</sup> スティーブン・D・アリー(Stephen D. Allee、フリーア美術館)による公式解説。 [https://asia.si.edu/wp-content/uploads/2023/05/song-yuan-f1930-36\\_documentation.pdf](https://asia.si.edu/wp-content/uploads/2023/05/song-yuan-f1930-36_documentation.pdf) (2024年1月31日確認) 参照。

(3) 女小娘□(子)宗花一心供養

録文注：「宗花」の部分の絹地はやや歪んでおり、判讀が難しい。葉は「女小娘子宗花一心供養」、王は「女小娘子□□持花一心供養」、馬、徐ほかは「女小娘子□□(延簾)一心供養」、張・郭は「女小娘子延簾一心供養」、フリーアは「女小娘[子宗花]一心供養」とする。

(4) 節度行軍司馬[金]紫光祿[大]夫[檢]校司空兼□□□□□□曹延□□(供)[養]

録文注：絹地の缺落により多くの部分が失われている。葉は「節度行軍司馬金紫光祿大夫檢校司空兼御史大夫上柱國曹延清供養」、王は「節度行軍司馬(中缺)校司空兼(中缺)曹延(下缺)」、馬、徐ほかは「節度行軍司馬金紫光祿大夫檢校司空兼御史大夫上柱國曹延□(瑞)供養」、張・郭は「節度行軍司馬金紫光祿大夫檢校司空兼御史大夫上柱國曹延□供養」、フリーアは「節度行軍司馬[金紫光祿大夫檢校司空兼御史大夫上柱國曹延清供養]」とする。



圖 12：繪觀音菩薩功德記

【功德記】[圖 12] 原文は右行

1 繪觀音菩薩功德記

2 竊以、弥陀上足號觀音焉、願力難思、慈悲普極。分形種類救苦毒於

3 三途、現化多門拔幽趣於六道。是施无畏者、急難消除。有識

4 虔誠盡繪者矣。即有我娘子以男司空爲新婦小娘子難月之

5 謂也。伏以司空、星辰降瑞、江海呈祥、役紫毫而八體宛然、穹素月而六  
6 鈞有異。遂乃發一心願、敬畫眞容。具相嚴成、丹彩已就。伏願娘子以司空  
7 承斯縁善、福祚壽松柏之年。小娘子共男郎君頼此勝因、祿寵等  
8 鶴龜之載。然後金枝九族、玉葉一宗、咸沐良縁、齊登覺路。  
9 于時乾德六年歲次戊辰五月癸未朔十五日丁酉題紀。

録文注：

2行目：「焉」 張・郭は「與」とする。

：「願力」 馬と徐ほかは「願力」を讀まない。張・郭は「願了」とする。

：「慈悲」 「慈」字の右下に非常に小さく細い字で「悲」字が補われている。『文  
録補』は脱字とし、馬、徐ほか、フリーアは「□」とし、張・郭は讀まない。

：「普極」 徐ほかは「及」、張・郭は「拯」とする。

：「苦毒」 『文録補』、馬、徐ほか、張・郭は「苦患」とする。

3行目：「三途」 フリーアは「塗」とする。

：「現化」 徐ほかは「現代」とする。

：「拔」 『文録補』、馬、徐ほかは「祓」とする。フリーアは「祆?」とする。

：「施无畏者」 『文録補』は「施□□者」、馬、徐ほかは「施□畏者」とする。

：「有識」 張・郭は「有諸」とする。

4行目：「盡繪」 『文録補』、馬、徐ほかは「盡給」とし、張・郭は「畫繪」とする。

5行目：「降瑞」 馬、徐ほかは「降質」とする。

6行目：「有異」 張・郭は「有翼」とする。

：「嚴成」 張・郭は「嚴然」とする。

7行目：「男郎君」 『文録補』、馬、徐ほかは「□郎君」とし、張・郭は「以郎君」とする。

：「祿寵等」 馬、徐ほかは「等」を讀まない。

8行目：「然後」 『文録補』、馬、徐ほかは「此後」とする。

：「金枝」 張・郭は「合枝」とする。

：「咸沐良縁」 『文録補』、馬、徐ほかは「感□良縁」とし、張・郭は「咸承善縁」  
とし、フリーアは「咸外良縁」とする。

：「齊」 『文録補』、馬、徐ほかは「同」とする。

9行目：「五月癸未朔」 馬、徐ほか、張・郭は「五月癸午朔」とする。

：「題紀」 王、『文録補』、馬、徐ほかは「題記」とする。

#### 【翻譯】

觀音菩薩を描く功德についての記

竊に思うに、阿弥陀佛の高弟は觀音菩薩であり、その願力は計り知れず、その

慈悲は限りなく廣大である。さまざまな姿に分身して、三途に苦しむ者を救い、さまざまな姿に現れて、六道に迷える魂を救う。これこそ畏れを取り除く者であり、困難を消し去るのである。(だからこそ) ころあるものは眞心をもってみな(その姿を)描くのである。つまり、(これこそが) 我らの娘子が息子の司空とともに新婦小娘子の臨月のために(その姿を描くことを)する理由である。思うに、(その) 司空は、星辰が瑞兆を現し、江海が祥瑞を呈すように(才氣と徳望に恵まれており)、紫毫(の筆)を取れば、八體を宛然と(書きあらわ)し、光り輝く月を彎曲させるように強弓(を引くこと)に飛び抜けている。そこで、(このようにすばらしい司空のためにも)ひたすら願いを込めて、観音菩薩の眞容を敬って描くことにしたのである。その姿は嚴肅であり、丹彩によって描き上げられた。娘子が息子の司空と良き縁によって、幸福に壽命が松柏のように長くありますように。小娘子(お嬢さま)と息子の若さまがこのすぐれた因縁によって、報酬と恩寵を得て鶴亀と等しく長生きしますように。それから、(この) 尊い一族がみな良縁に恵まれ、みな悟りの道を歩めますように。

(北宋) 乾徳六年(968) 歳次戊辰五月癸未朔十五日丁酉に記した。

功德記には観音菩薩の功德、圖像作成の目的、供養人への贊辭や彼らやその一族の繁榮長壽の祈願等が記されている。まず、テキストの最初の部分は苦難を救済する観音の功德について説明されている。つぎに、娘子がその息子の司空とともに、この水月観音菩薩圖を新婦小娘子の安産祈願のために作成したことが述べられており、この娘子が本作品の發注者であることがわかる。この娘子は、「慈母」である供養人第2身の李氏、息子の司空は男性の姿である供養人第4身の曹延□、新婦(よめ)小娘子は成人女性の姿をしている供養人第1身の陰氏であろう。さらに、司空への贊辭や家族の繁榮・長壽・成道を願う文が続いている。なお、明記はされていないが、少女の姿の供養人第3身の女(むすめ)小娘子宗花は、7行目の「小娘子共男郎君」の小娘子にあたるであろう。なお、この「男郎君」は家中の年少の男子であると思われるが、供養人像には描かれていない。功德記で言及されたこれらの供養人たちは、明らかに乾徳六年(968) 當時の沙州(敦煌)を支配した曹氏歸義軍節度使の一族である[圖13]。乾徳六年(968)は第4代曹氏歸義軍節度使の曹元忠の治世(944-974年)にあたる。供養人第4身の曹延□は、三公の一つである司空を帯びる曹氏の高位者であり、元忠やその兄弟の子供たちと同じ延字付きの名前である<sup>10</sup>。つまり、この司空曹延□(供養人第4身)は曹元忠、

<sup>10</sup>曹氏一族の延字名の人物には、元深の息子の延恭、元忠の息子の延禄・延晟・延瑞、同じく元忠のむすめの延肅がいる。延恭が元深の息子であることについては、赤木2017、243頁参照。

あるいはその兄の曹元徳・曹元深の息子であり、その母の李氏（供養人第2身）は元徳・元深・元忠のいずれかの妻にあたるだろう。なお、この司空曹延□が曹氏一族の曹元忠らの子供の世代に属することは、曹延□のむすめとみられる宗花（供養人第3身）が、延字名をもつ世代の子供たちが持つ宗字付きの名前<sup>11</sup>であることから明らかである。

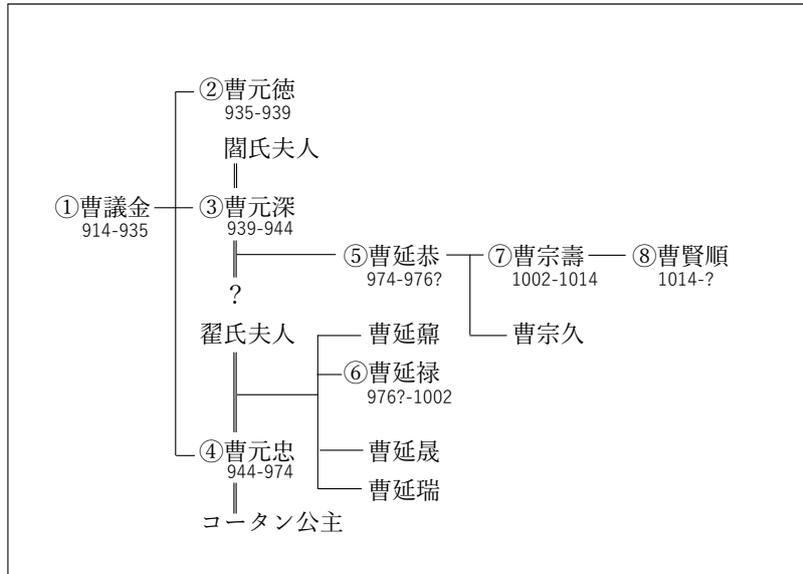


圖 13：曹氏歸義軍節度使の系譜

(赤木 2019、90 頁、圖 12 を基に作成)

#### 四、供養人の比定

本作品の供養人のうち、人物比定の鍵になるのは、供養人第4身の司空曹延□である。なぜなら、彼は當時の歸義軍節度使曹元忠の男性親族である可能性が高く、この人物が特定されれば、彼をめぐる人間関係が明確になり、その妻、母、むすめにあたる供養人第1身、第2身、第3身の位置付けも可能となるからである。

供養人第4身の司空の人物比定には、いくつかの説がある。第4身の題記は絹地の欠落のため現在は「曹延□」としか読むことができない。しかし、葉昌熾が本作品を入手した時点では、この欠落はなかったようで、葉昌熾は第4身の題記を「節度行軍司馬金紫光祿大夫檢校司空兼御史大夫上柱國曹延清供養」と読み、司空の名前を「曹延清」とする<sup>12</sup>。つぎに、王國維が本作品を観察した時点では、す

<sup>11</sup>曹氏節度使一族の宗字名の人物には、延祿のおいの第7代曹氏歸義軍節度使の宗壽、その弟の宗久がいる。

<sup>12</sup>本稿第一章参照。

で「延」字の下は脱落していたとみられ、王國維は供養人第2身を曹元忠の妻とみなし、司空を彼が曹元忠の息子とみなした第5代曹氏歸義軍節度使の「曹延恭」に比定している<sup>13</sup>。その後、姜亮夫は葉昌熾の日記の記載をふまえて王國維の説を検証し、曹延恭が曹元忠のおいであって息子ではないことから、この司空を第6代曹氏歸義軍節度使曹延禄の弟である「曹延瑞」にあてている<sup>14</sup>。ただし、姜亮夫は本作品の實物や寫眞を見て研究したわけではなく、最終的な結論は保留している。その後、姜亮夫の説は、本作品を寫眞から再検討した馬徳にも受け継がれている<sup>15</sup>。さらに、張小剛・郭俊葉は、本作品の供養人第1身の陰氏を曹延禄の妻とみなし、司空を曹延禄とする<sup>16</sup>。なお、馮培紅は姜亮夫の説を批判し、葉昌熾の読みを受け入れてこの司空を「曹延清」とし、延清を曹元忠の子とみなし、延禄・延瑞らの兄弟にあてている<sup>17</sup>。

まず、この司空が曹延恭であるとする王國維の説は、稱號の不一致により否定できる。この司空の乾德六年(968)時點の稱號は、「節度行軍司馬 [金] 紫光禄 [大夫] [檢] 校司空兼□□□□□□曹延□□ (供) [養] (葉昌熾は「節度行軍司馬金紫光禄大夫檢校司空兼御史大夫上柱國曹延清供養」とする)」である。これに對して、同時期の曹延恭の稱號は、北宋建隆三年(962)の朝貢の際に瓜州團練使から瓜州防禦使に遷っており<sup>18</sup>、曹元忠の死の前後の974年頃には、「瓜州防禦使金紫光大夫檢校司徒」(P.3827+P.3660v)であったと見られる<sup>19</sup>。このように、曹延恭は、本作品の作成年代の乾德六年(968)前後の時期に瓜州團練使や瓜州防禦使などの瓜州に關する軍職の稱號を一貫して保持している。これに對して、この司空は瓜州關係の稱號を持たず、行軍司馬を保持しており、曹延恭の稱號とは全く異なる。歸義軍節度使府の高官である行軍司馬<sup>20</sup>と三公の司空の稱號を持つこの人物は、曹氏節度使一族の高位者であることは間違いないものの、曹延恭ではありえない。

また、この司空が曹延禄や曹延瑞などの曹元忠の息子だとする説も、描かれた人

<sup>13</sup>王 1923、986 頁。

<sup>14</sup>姜 1981、77-78 頁。

<sup>15</sup>馬徳 1999、171-172 頁。蔡 2011、101-102 頁、田林 2019、42-43、48-49 頁も同様に姜亮夫説を採用している。

<sup>16</sup>張・郭 2021、495 頁。

<sup>17</sup>馮 2004、56-57 頁。なお榮新江も「延清」説を取っているようである。榮 1996、29 頁。

<sup>18</sup>『宋會要輯稿』卷 198、蕃夷 5、瓜・沙二州(中華書局本、7767 頁)、『續資治通鑑長編』卷 3、建隆三年正月條(中華書局本、61 頁)、『宋史』卷 490、外國 6(中華書局本、14124 頁)。

<sup>19</sup>榮 1996、124 頁。

<sup>20</sup>上海博物館所藏の清泰四年(937)曹元深祭神文(上博 48(41379)-37)の冒頭には、「維大唐清泰四年歲次丁酉八月辛巳朔十九日巳亥、孤子歸義軍行軍司馬銀青光禄大夫檢校國子祭酒兼御史大夫上柱國誰(譙)郡曹元深等」とあり、當時の第2代曹氏歸義軍節度使曹元徳の弟である曹元深がこの稱號を保持していたことがわかる。この祭神文については、劉 2005、150-153 頁を参照。また、行軍司馬の役職については、嚴 1969、182-187 頁、馮 2004、55 頁参照。

物像から推測されるおよその年齢から否定できる。本作品の供養人第4身は、この司空の乾徳六年(968)頃の姿を寫したものと考えられる。その姿は、あきらかに成人した大人の男性であり、妻と娘とともに供養する姿勢は堂々としているように見える。一方、曹元忠の息子の曹延禄は、962~964年頃に作成されたとされる榆林窟第19窟や第36窟には<sup>21</sup>、幼い少年の姿の供養人として描かれている〔圖14〕。壁畫や絹繪に描かれる供養人像がいかにか様式化されたものであったとしても、榆林窟第19窟や第36窟に幼い少年の姿で描かれていた曹延禄が、わずか4~6年の後に、本作品の男性供養人のように成人し、妻帯し、女兒をもうけたと考えるのはあまりに不自然であろう。そして、曹延禄が當てはまらないのであれば、延禄の弟でより年少の延瑞には、なおさら當てはまらない。なお、この司空が曹元忠の息子ではないのであれば、慈母を曹元忠の妻の翟氏にあて、女小娘子をそのむすめの曹延勳にあてる解釋<sup>22</sup>も成り立たない。

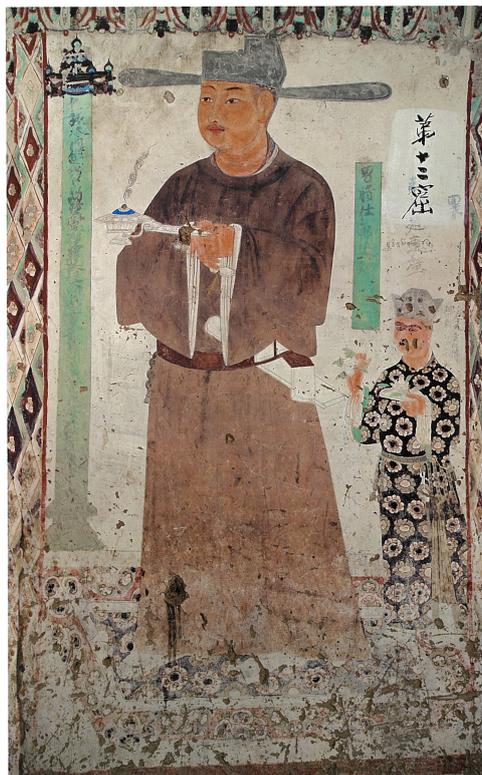


圖14：榆林窟第19窟甬道南壁の曹延禄像（右側の少年像）

以上の先行研究の説が成立しないとすれば、第4身の司空「曹延□」は、今まで知られていなかった曹延恭の弟ないし従弟であろう。まず、曹延□は、名に延字を持つことから、曹氏一族の曹延恭や曹延禄と同じ輩行の人物である。また、乾

<sup>21</sup>榮 1996、120-121 頁。

<sup>22</sup>姜 1981、78 頁、馬 1999、172 頁、張・郭 2021、464-465 頁参照。

徳六年（968）時點で、彼は明らかに延祿より年長であり、行軍司馬や司空などの高位の稱號を持っている。しかしながら、彼は瓜州方面の軍職にも就かず、元忠の死後（974年）に節度使を繼ぐこともなかった人物である。この條件から導き出される人物は、延恭と同輩行でほぼ同格ではあるものの、序列は下の人物、つまり延恭の弟ないし、従弟であろう。従弟の場合は、前述のようにこの曹延□は元忠の息子ではありえないので、元徳の息子であろう。なお、現状では曹延□の缺落部分は完全に失われており、葉昌熾の「曹延清」の讀みが正しかったのか、あるいは誤りであったのかは、もはや檢證することはできない。そこで、本稿ではこの人物を「曹延□」と呼稱するに止める。

また、この曹延□は、丙子年（976）司空遷化納藏歴（S.3978）で死去したとされる司空と同一人物の可能性がある。この納藏歴は、丙子年（976）七月一日に死去した司空のために贈られた香奠の帳簿である。従来、この文書の司空は曹延恭に比定されており、彼の没年はこの文書により976年とされてきた<sup>23</sup>。ただし、曹元忠の死の前後（974年）には、延恭はすでに司空から司徒に遷っている可能性が高く、この説には疑念が持たれていた<sup>24</sup>。もし、本作品の供養人第4身の司空曹延□が、司空遷化納藏歴の司空と同一人物であれば、丙子年（976）七月に死去したのは司空曹延□ということになり、曹延恭の没年は977年の夏頃まで延びる可能性がある<sup>25</sup>。

なお、莫高窟第61窟の主室北壁第10身の供養人像には「嫂小娘子李氏一心供養」との題記があり<sup>26</sup>、曹元忠の嫂（あによめ）の一人に李氏がいることがわかる。ただ、この李氏が、元徳の妻なのか、あるいは元深の妻なのかは分からない。しかし、この人物が本作品の供養人像第2身の李氏と同一人物である可能性は非常に高い。また、窟主が曹延恭である莫高窟第454窟主室南壁第2身の題記には「故慈母勅授太原郡夫人閻氏一心供養」とあり、同第3身には「慈母…」とあって、曹延恭には2人の母がいたことがわかっており、このうち第3身は延恭の實母の可能性もある<sup>27</sup>。したがって、もし曹延□が延恭の實弟であれば、この第3身の判讀不能部分も「李氏」であったはずである。

<sup>23</sup> 竺沙 1982、540–541 頁、賀 1986、230 頁参照。

<sup>24</sup> 榮 1996、124 頁、森安 2000、78–79 頁参照。

<sup>25</sup> 丁丑年（977）八月九日に處理された作坊使の判憑文書（S.8673）では、曹延祿が彼の特徴的な鳥形花押を使って處理を行なっているので、この頃までに曹延祿が歸義軍の首長を繼承していることは間違いない。なお、歸義軍節度使による判憑文書などの文書處理については、坂尻 2018、18 頁参照。

<sup>26</sup> 『供養人題記』、24 頁。

<sup>27</sup> 郭 2015、52–59 頁、赤木 2019、89–90 頁参照。

## 五、本作品の位置付け

10世紀の敦煌絹本畫を寸法に基づいて3分類すると、本作品は、第2類に位置する<sup>28</sup>。この分類は、縦の寸法が、第1類：120cm以上、第2類：120cm未滿100cm以上、第3類：100cm未滿と分類するものである。この枠で、繪畫の作行きの水準や發注者の身分が、相對的に變化し、第1から2、3へと進むに従って、それらは低下していく。第1類の發注者は、王族や高官、大寺院の僧侶といった上層階級者に限られ、第2類において官位の低い者複數人が協力して發注する作品が現れ、第3類では庶民が一人で發注する作品も見られる。前掲したギメ「被帽地藏菩薩十王圖」〔圖8〕や「千手千眼觀音菩薩圖」〔圖9〕が第1類の代表作で、四川博物院「水月觀音菩薩圖」〔圖7〕が第2類に当たる。第3類の例としては、白鶴美術館所藏「藥師如來圖」〔圖15、天成四年(929)〕がある。ただし、以上の傾向はあくまでも相對的なものであり、第2、3類において、描畫水準の高い作品も存在し、また統治者階級(王族)が發注した作品もある。「觀音曼荼羅」〔圖16、天福六年(941)〕は、縦の寸法91.5cmであるが、立體感のある描畫、金も多用した入念な彩色が際立つ優品である。更に、後の第7代曹氏歸義軍節度使の曹宗壽の發注した作品「十二面六臂觀音變相」(ハーヴァード大學美術館所藏、雍熙二年(985)、作品については要検討)が縦97.5cmと第3類に入れられる。そして、本稿で着目しているフリーア美術館所藏「水月觀音圖」も王族の曹氏一族發注になるも第2類に分類される。



圖15：藥師如來圖 白鶴美術館所藏



圖16：重要文化財 觀音曼荼羅圖

<sup>28</sup>田林 2019、41-57 頁參照。



圖 17：童子像 被帽地藏菩薩十王圖  
ギメ東洋美術館所藏



圖 18：雷神像 莫高窟第 98 窟南壁

第二章でまとめた通り、本作は、高低の描畫水準を併存させており、彩色や描き込みの入念さにおいて、第 1 類の作品には及ばず、法量の水準と違わずに作行きにおいても中間的な位置付けにある。更に、本作では、水月觀音の圖様は、複数の紙本畫に用いられる一般に流通したそれを基本としており、同じく第 2 類に位置づけられる四川博物院本のように片脚を踏み下げることもしておらず、完全なオーダーメイドの要素を欠いている。そして、基底材の絹においても、無官職の者による發注品である第 3 類の白鶴美術館所藏「藥師如來圖」[圖 15] の 1cm 四方あたり經絲 54 本、緯絲 28 越と、その詰まり具合、すなわち質は大きく變わらない。ただし、尊像の描き起こし、供養人像における頭部の描線や彩色は丁寧かつ入念であり、供養人の顔貌には各人の個性が反映されており、裝飾も王族としての身分に相應のものである。よって、10 世紀の敦煌においては、支配者層から庶民までの發注を受けるシステムがあり、尊像部分の圖様、裝飾や文様の一律のベースの上に、發注者の身分や發注内容に應じて圖様や供養人像、仕上がりの具合を調整するセミオーダーの體制が整っていたと言える<sup>29</sup>。これは従來から指摘される「畫院」<sup>30</sup>の實態を示唆するが、畫院がその體制の中に包括されるのか、あるいは畫院がそれを覆う組織であるのかは検討を要する。第 1 類に分類され、最大級の法量を誇るギメ美術館「被帽地藏菩薩十王圖」や曹氏開鑿窟（莫高窟第 98 窟等）においても細部では粗雑な仕上がりを見せる [圖 17、圖 18] ことから、作品間での描畫水準の幅の廣さ（仕上がりの良し悪し）と共に一畫の中でも細部に水準の違いが現れるのが所謂敦煌畫派の主流作品と捉えられる。その上で、本作は、仕上がり具合もギメ被帽地藏には遠く及ばず、第 2 類に位置し、かつ一般的な尊像圖様を用いていることから、王族でも必要に應じてこのレベルの作品を發注し

<sup>29</sup>田林 2019、56 頁参照。

<sup>30</sup>段文傑「莫高窟晩期の藝術」、敦煌文物研究所（編）『中國石窟・敦煌莫高窟』第 5 卷、平凡社、1982 年、143 頁参照。

ていたことを示す貴重な事例であると言える。

## おわりに

本研究では、フリーア美術館に所蔵されている水月観音菩薩圖の傳來、繪畫の特徴、功德記・供養人題記の解讀、供養人の比定、そして本作品の位置づけについて、歴史學と美術史學の方法論を用いて詳細に考察を加えた。その結果、本作品が10世紀の敦煌における圖像作品のセミオーダー體制の重要な事例であることが明らかになった。また、本作品の供養人の司空「曹延□」と彼の家族とが曹氏歸義軍節度使の系譜の再現に影響を與えることも確認した。これらの成果は、本作品のような藏經洞由來の圖像作品の研究の新たな方向性を示すものである。今後、歴史學と美術史學の手法を合わせて藏經洞由來の圖像作品を分析し、作品が作成された背景や作品が持つ機能をより明らかにしていきたい。

### 【略記】

『縁督廬日記』＝葉昌熾『縁督廬日記』南京、江蘇古籍出版社、2002年。  
『供養人題記』＝敦煌研究院(編)『敦煌莫高窟供養人題記』北京、文物出版社、1986年。  
『文録補』＝羅福葆(編)『沙州文録補』(羅振玉『羅雪堂先生全集』4編第12冊、1924年：再版、文華出版・大通書局、1968-1976年、5775-5851頁)。

### 【文獻目録】五十音順

赤木崇敏 2017「曹氏歸義軍節度使系譜攷—2つの家系から見た10～11世紀の敦煌史—」、土肥義和・氣賀澤保規(編)『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』東京、汲古書院、237-261頁。

—— 2019「曹氏歸義軍節度使時代の敦煌石窟と供養人像(二)」『敦煌寫本研究年報』13、79-98頁。

榮新江 1996『歸義軍史研究』上海、上海古籍出版社。

—— 1997「葉昌熾——敦煌學的先行者」、*IDP News* 7、1-5頁(再録：同著『敦煌學新論(增訂本)』蘭州：蘭州教育出版社、2021年、246-252頁)。

王國維 1923「曹夫人繪觀音菩薩象跋」『觀堂集林』卷20、密韻樓(再録：『王觀堂先生全集』冊3、臺北、文華出版公司、1968、985-987頁)。

賀世哲 1986「從供養人題記看莫高窟部分洞窟的營建年代」、敦煌研究院(編)『敦煌莫高窟供養人題記』北京、文物出版社、194-236頁。

郭俊葉 2015『敦煌莫高窟第454窟研究』蘭州、甘肅教育出版社。

- 姜亮夫 1981 「讀王靜安先生曹夫人繪觀音菩薩像跋」『蘭州大學學報（社會科學版）』1981-4、77-78 頁。
- 嚴耕望 1969 「唐代方鎮使府僚佐考」、同著『唐史研究叢稿』香港、新亞研究所、177-236 頁。
- 蔡副全 2011 「葉昌熾與敦煌文物補說」『敦煌研究』2011-2、95-103 頁。
- 坂尻彰宏 2018 「歸義軍節度使と公文書處理」『内陸アジア言語の研究』33、11-26 頁。
- 徐自強・張永強・陳晶（編）2014 「敦煌莫高窟繪畫題記」、同編『敦煌莫高窟題記彙編』北京、文物出版社、403-454 頁。
- 田林啓 2019 「十世紀の敦煌における佛畫制作をめぐる一白鶴美術館本二題の位置づけと共に」『佛教藝術』2019-2、35-59 頁（再録：同著「敦煌佛畫制作システムの確立—十世紀敦煌絹本佛畫」『敦煌美術東西交界史論』中央公論美術出版、2022 年、365-398 頁）。
- 田林啓・坂尻彰宏 2024 「米國所藏の敦煌絹本畫三題の位置づけ」『大阪市立美術館紀要』24、印刷中。
- 竺沙雅章 1982 『中國佛教社會史研究』京都、同朋舎出版（増訂版、京都、朋友書店、2002 年）。
- 張小剛・郭俊葉 2021 「敦煌所見于闐公主畫像及其相關問題」、樊錦詩・楊富學（編）『敦煌與中外關係研究』蘭州、甘肅文化出版社、445-467 頁。
- 馬德 1999 「散藏美國的五件敦煌絹畫」『敦煌研究』1999-2、170-175 頁。
- 馮培紅 2004 「敦煌歸義軍職官制度—唐五代藩鎮官制个案研究」蘭州、蘭州大學博士學位論文。
- 森安孝夫 2000 「河西歸義軍節度使の朱印とその編年」『内陸アジア言語の研究』15、1-121 頁、15 圖版、1 圖表。
- 劉屹 2005 「上博本《曹元深祭神文》的幾個問題」、國家圖書館善本特藏部敦煌吐魯番學資料研究中心（編）『敦煌學國際研討會論文集』、北京、北京圖書館出版社、150-161 頁。

#### 【圖版出典】

- 圖 1~4、12 フリーア美術館提供。
- 圖 5、8、17 ジャック・ジエス（編）『西域美術—ギメ美術館 ペリオ・コレクション』第 2 卷、東京、講談社、1995 年、圖版 63-3、63-1、63-1。
- 圖 6 田林啓撮影。
- 圖 7 四川省博物館（編）『四川省博物館』東京、講談社、1988 年、圖版 119。
- 圖 9、10 ジャック・ジエス（編）『西域美術—ギメ美術館 ペリオ・コレクション』第 1 卷、東京、講談社、1994 年、圖版 98-12、83-1。

圖 11 大英博物館提供 (Image ID: 00000095001)。

圖 14 敦煌研究院 (編)『榆林窟』南京、江蘇美術出版社、2014 年、圖版 51。

圖 15 白鶴美術館 (編)『白鶴美術館館藏品選集』神戸、白鶴美術館、2018 年、圖版 122。

圖 16 國立故宮博物院提供。

圖 18 譚蟬雪 (主編)『敦煌石窟全集 25 民俗畫卷』香港、商務印書館、1999 年、圖版 206。

(作者の坂尻彰宏は大阪大學全學教育推進機構准教授、田林啓は大阪市立美術館學藝員)